

実践キャリア・アップ戦略

カーボンマネジャーWG

第14回会合議事録

内閣府政策統括官（経済財政運営担当）付
産業・雇用担当

実践キャリア・アップ戦略 カarbonマネジャーWG
第14回会合
議事次第

日 時：平成26年7月7日（月）10:00～11:30

場 所：合同庁舎8号館8階特別中会議室

1. 開 会

2. 議 題

Carbonマネジャー制度の今後の改善に向けた取組について

3. 閉 会

○松橋座長 それでは、まだお見えになっていない委員の方もいらっしゃるかもしれませんが、定刻になりましたので、ただいまより「カーボンマネジャーWG」の第14回会合を開催いたします。

本日欠席されている委員でございますが、熊崎委員、末吉委員、西本委員、重里委員、藤井委員でございます。吉田委員も御欠席ということです。

それでは、開始いたします。

前回のワーキンググループでは、カーボンマネジャーキャリア段位制度の現状を踏まえた、今後の方向性について御議論いただきました。

今回は、前回ワーキンググループからの取り組み状況について事務局から報告するとともに、検討中の論点についても御議論いただければと考えております。

それでは、まず資料の確認のほうを事務局からお願いいたします。

○國生専門職 本日の資料は1種類でございますが、この議事次第の1枚べらのものの下にホチキスどめしております、最後のページの通し番号が14となっているかと思いますが、そちらの資料一式のみでございます。

皆さん、お手元でございますでしょうか。

○松橋座長 よろしいですか。

それでは、早速この資料につきまして、事務局のほうから御説明をお願いいたします。

○國生専門職 では、私のほうから御説明差し上げます。

まず、資料の表紙を1枚おめくりいただきまして、本日の簡単な構成でございますけれども、3カ月前の4月7日に開催いたしました前回のワーキンググループでの主な議論を簡単に復習といえますか、もう一回総ざらいしたいと思います。

その後、前回のワーキンググループ以降に取り組んでまいりました内容について簡単に御報告を申し上げた後に、前回のワーキンググループでは改善の大きな方向性といったところを御議論いただきましたので、そういった方向性に基づいて、具体的にどういった取り組みをしていくかということの、事務局としての案を御説明したいと考えております。

内容といたしましては、まず「レベル設計について」次に「普及啓発について」そして、その普及啓発の1つのカテゴリーではあるかもしれませんが「名称について」ということでございます。

そして、最後に今後のスケジュールを簡単に御説明申し上げたいと思います。

それでは、中身に入りますが1枚おめくりいただきまして、ページ番号の2番の「前回（第13回）WGでの主な議論」でございます。

こちらが復習ということになりますけれども、まず「対象とする分野について」は、これまでのカーボンマネジャーとして、省エネですとか温室効果ガス削減といったものを中心に対象としてまいりましたが、環境エネルギー分野全般を広く網羅していこうということ、改めて確認をしたところでございます。

その中で、近年再生可能エネルギーですとか、スマートコミュニティー、HEMS・BEMSと

いった分野、こういったワードは一緒に世間で関心が高まっているという現象もございますので、こういった分野をうまく取り込んでいくことで、制度を一層うまくアピールしていく必要があるという議論がございました。

そして「ニーズ・普及啓発について」は、まず制度のニーズがどこにあるのかという点について、引き続き見極めていく必要があるということ、制度をもっと活用してもらえよう、経済界と相談・アピールしていく必要があるということ、客観的なデータを活用して、普及啓発を進めていく必要があるという御議論がございました。

その中で、このページには書いてございませんけれども、事務局のほうから普及啓発アドバイザーボードの立ち上げという御提案を差し上げた次第でございます。

次に、レベルの設計につきましては右上でございますが、これまでの「わかる」の認定におきまして、研修の受講義務というものが制度上ございましたけれども、これは企業へのヒアリング等の結果を踏まえると、その必要性は理解されても、やはり認定を受けようとする際のハードルになっているということが、どうしてもあるという現状を踏まえまして、研修の受講義務を外した上で制度の運用を考え直していこうというお話がございました。

あわせて、その「わかる」を認定する上で、試験ばかりではなくて既存の関連資格を取得していることをもって「わかる」を認定していこうという連携を、今後検討していこうということがございました。ただし、決してこれは要件を簡単にする、緩めるということではなくて、あくまでも運用の弾力性という観点で検討していくべきだというお話がございました。

そして、今後も制度の間口をどんどん広げていくという観点から、レベル1を短期間の間に多く認定していくことが喫緊の課題であって、そのことも検討を進めていかなければならないという話がございました。

「その他」は、先ほどもちょっと申し上げましたけれども、この「名称の変更について、長期的な視点も踏まえつつ」というのは、とにかく名称がころころ変わってはいけませんので、長期的な視点も踏まえながらも、やはり検討していく必要があるという話がございました。

前回までお話したのはこんなところでして、次のページは前回のワーキンググループ資料からの抜粋なのですが、これがその対象分野を広く見ていこうということを図示したものでございまして、この右下にございますような緑の「再生可能エネルギー」ですとか「スマートコミュニティー」など、この辺の分野を今後制度の普及のために、広く取り込んでいこうということのお話があったところでございます。

続きまして、次の4ページでございますが「前回WG以降の取組状況」ということで、まず1つ目は「関連資格との連携・研修義務の見直しについての検討・準備」ということで、これは後ほど詳しく御説明を申し上げますが、主にレベル1について、既存資格との関係づけ、連携の可能性や妥当性を検討してきたところでございます。

また、研修義務を外した運用につきましては、レベルの2というのは、従前は研修の中で実施する演習を通じて「できる」を認定するというスタイルをとっておりましたが、研修義務を外すとこの「できる」の部分がなくなってしまうので、これは試験の中に演習課題として盛り込んでいくという形になろうかと思っておりますので、そういった「わかる」「できる」の両方が確認できるような試験といったものを、今、問題の改修の作業を行っているという状況でございます。

また、普及啓発につきましては「普及啓発アドバイザリーボード」というものを、産業環境管理協会の中に設置している運営委員会の下に設置をいたしまして、こちらはそのメンバーを挙げてございますが、こちらは環境ですとか省エネといった分野というよりは、広報・マーケティングといった分野の高い知見を持つ方々に、お集まりをいただいたということでございます。

第1回の委員会を昨年、5月29日に開催しております、また、まだ第1回でございますのでちょっと顔合わせに近いところもあったのですが、委員の方々からはたくさんの御意見をいただきまして、下に掲げてございますけれども「分かりやすい制度にすべき」ですとか、制度の目的・対象の明確化、やはりここでもネーミングの話は出てきました。その際、やはり検索頻度の高いワード等の分析が必要ではないかという御指摘など、ウェブの有効活用も含めてさまざまな御指摘をいただいたところでございます。

そして、企業への追加のヒアリングということについては、やはりその企業・現場のニーズということの把握は、ずっと引き続きやっていかなければいけないことでございますので、前回のワーキンググループ開催以降も時間を見つけて随時、企業へのヒアリングは実施しているところでございます。

次の5ページも現状の確認になるのですが、これは本当に皆様よく御存じのことかと思っておりますが、現状のレベル設計を改めて確認すると、現状としてはやはり「わかる」の方が全て「試験により認定」との形になっています。

「できる」の方については、研修義務がなければレベル2については、試験の中の演習課題によって認定していくということ。

3、4についてはこれまでと同様に、実務経験の事例の評価によって認定していくというスタイルに、現状なっているということでございます。

現状の説明が長くなってしまっていて恐縮ですが、次のページからが今後のお話でございます、まず「レベル1」につきましては、できるだけ既存の資格との関係づけを図っていくという観点から、事前から議論はございましたが、東京商工会議所さんのほうで実施しているeco検定の合格者を本人からの申請に基づいて、カーボンマネジャーのレベル1に認定するといった連携といいますか、カーボンマネジャーとしてそのeco検定を認定するといってもいいかもしれませんが、そういった関係づけを今後図っていければと思っております。

これは、もちろんその東京商工会議所さんが実施している検定ですので、そういう相手

のあるお話になりますので、我々として思っている形の連携が100%いくかは今後の調整次第などところはございますけれども、こういった形での連携を図っていきたいと考えております。

こういった既存資格との関係づけを図っていくという観点はレベル1のみならず、全てのレベルに共通した今後の改善の方向性というところがございます。「eco検定の概要」について、御説明を差し上げますと、東商さんが実施しているもので、2006年に試験が開始されて以来、まだそれほど時間はたっておりませんが、累計33万人以上が受験をされているという規模の大きなものになっております。

2013年度は、28,663人が受験して1万7,000人強が合格ということで、毎年大体これくらいの規模の合格者が出てくる。

その中で、受験者の内訳を見てみると約8割が社会人かつ、多くの企業で社員教育としてeco検定を活用しているという現状を見ても、こういった実践キャリア・アップ戦略というもののターゲットとしている層という意味では、親和性は高いのかなと考えております。

続きまして「eco検定の概要」の次の7ページでございますが、こちらでは出題範囲をざっと並べてございます。

ごらんいただくと、おわかりいただきますように、非常に広範な分野が出題の範囲になっておりまして、この中でも、もちろん省エネルギーですとか、再生可能エネルギーといったものは当然分野として含まれておりまして、そのカーボンマネジャーのレベル1で要求する分野といったものは、おおむね包含しているのではなかろうかと考えるところでございます。

続きまして、難易度のお話なのですけれども、次のページの8番になりますが、ちょっとこちらには具体的に問題を1ページで恐縮ですが、幾つか並列に並べております。

これはサンプルとして、例えばヒートアイランドですとか、エネルギー供給比率ですとか、省エネ法といった分野についての問題を並べたものでして、もちろんその問題のスタイルといったものに差はございますが、正解を出すために求められる必要な知識という面而言えば、カーボンマネジャーレベル1とeco検定はほぼ同じではなかろうかというのが、事務局として問題を比較、検討をした結果の結論でございます。

こういったターゲットですとか、出題範囲、難易度といったところを総合的に踏まえて、eco検定合格者をカーボンマネジャーレベル1に認定することは差し支えないだろうというのが、事務局として至った結論でございます。

そして、今後、もちろんそういった形でeco検定合格者の方をレベル1に申請があれば認定していくという形のスタイルを、御了承をいただければこの後、東京商工会議所さんともっと具体的な調整を開始していこうと考えております。

また、いろいろ検討しなければならないことがございまして、例えば認定料のこともございまして、9ページですが、認定料をどうするかという話も今後検討していかなければならないのですが、eco検定の受験料は5,400円ということがあって、実際これを払って受

験された方が、また、カーボンマネジャーレベル1に認定を申請する際に、どのくらいのお金を払ってくれるものなのかということ、恐らく普通に考えてそれほど払うインセンティブはないだろうということもありますので、基本的にはこの場合の認定料というのは、無料とする方向で検討していく必要があるのかなと考えております。

今後の作業の例としましては、eco検定は夏と冬に試験が2回ございまして、冬の試験が12月14日ですけれども、その受験者に対してeco検定に合格すれば、カーボンマネジャーレベル1の認定が可能ですよということを、周知できれば理想的であると思っております。

また、受験者だけではなくて、合格者に対しても再度周知を行って、あわせてそのさらなるステップアップとしてレベル2というものがあるということも、知らせていければと思っております。

なお、夏の試験は既に申し込みが終了してございますが、こちらの合格者に対しても、できれば、申請すればレベル1認定が可能であるということ周知していければと考えております。

こういったeco検定との関係づけはやっていくのですが、もちろん現行のレベル1の試験も引き続き運用はしていこうと思っております。

こうしたeco検定との関係づけをすることの効果として、もちろんカーボンマネジャーといったものの認知の向上がございまして、レベル1の取得の方法がふえることによって認定者数も増加が見込まれると考えております。

また、認定者数がある程度増加していくことで、さらなるステップアップを目指す方々による、レベル2以上のニーズの掘り起こしというものがあるのではないかと考えているところでございます。

次が、先ほども申し上げたいろいろな企業からも、随時いろいろな声を聞いておりますというところで、eco検定と関係づけ、連携を図っていくことについてもどうでしょうかという形で、少し御意見を聞いてみたのですが、特段否定的な意見はございませんで、また、こういった関係づけ、連携の方向性が固まれば、社内イントラ等で社員に広報することも可能であるといったようなお声もいただいているところでございます。

下の「スケジュール」は、先ほど文字で申し上げたところを、図にしたところでして、冬の試験が12月14日ですので、その申し込み期間が9月末からというところで、ここから周知等を始めることができればと、計画をしているところでございます。

続きまして「レベル2」なのですけれども、このカーボンマネジャーの制度として対象とする分野を「その他環境・エネルギー分野」のほうに広げていこうという話があった中で、現状のレベル2の試験というものは再エネですとか、スマートコミュニティー等の先ほどの図で言うところの緑色であった「その他環境エネルギー分野」についての問題をほとんどカバーしていないという現状かございますので、こういった状況の中でやはりこちらについても、できれば先ほどのeco検定のように既存の資格でもって、何か代替といえますか、既存の資格を認めることによって「わかる」を認定していければと考えたところで

はございますが、ちょっと我々事務局ですとか、産環協のほうとも協力しているいろいろな既存の資格を見ていった中で、現状としては余り適当なものがないという状況がございましたので、こちらについては問題を作成していくということ、追加していく必要があろうかということになっております。

もちろんレベル2以上というのは、知識だけではなくて実務ができるレベルと従前から位置づけてございますので、やはりこのレベル2で想定する「できる」の力、具体的に言うと、一定の指示のもとに省エネ法の定期報告書等を作成するといった、実務の力を確認する必要がございますので、試験においてはこういった基礎的な実務能力を確認する演習問題というものをしっかりと盛り込んで、ちゃんと知識だけではなくて、実務能力を認定できるレベルにしていきたいと思っております。

※の1番は、先ほど申し上げたような既存資格との関係づけの件でして、2つ目の※の受験料についても同じように、これも具体的に幾らということが適当かとのところまではまだ議論が進めませんが、やはりいろいろ制度の設計を見直す中で、もう一度見直しは必要ではないかと思っております。

また、レベル2のほうについては「eco検定の上級版として」というのは、決してレベル2がeco検定の上級版というわけではないのですが、そういった中で省エネを実務として生かせることを確認できる資格があれば、ニーズがあるのではないかといい声企業が企業さんからあったということと、あとは法律ですとかLCAといった企業の付加価値を上げる内容とするのいいのではないかといいいろいろな、さまざまな御意見をいただいているところですので、こういった御意見は今後レベル2の問題を設計していく中で生かしていこうと思っております。

他の具体的な作業として、上記のこの対象分野を拡大した試験というものを、来年度から本格的に実施していこうとは考えておりますが、その際にどれほどの実際のニーズがあるのかということと一回確かめた上で、本格実施していきたいと思っております。12月ごろを目途にトライアルという形で、一度試験を実施してみようかなということを考えております。

この際に、ここも今後東商さんとの相談が必要なのですが、可能であればeco検定の取得者、エコピープルという呼び名になっていきますけれども、そういった方々にお声かけをして、その方に1回受験を試していただいて、その中で問題の中身ですとか、レベル感について御意見を頂戴して、本格的な実施に向けた試験内容、問題内容のブラッシュアップを図ることができればと考えております。

そして、ここもまた要調整ではございますが、トライアル試験においても一定の成績をおさめた方にはレベル2を認定するということが、考えてとしてはあるのではなかろうかと思っておりますので、そこはこういった問題になるのかということも含めて、こういった方法も考えていこうと思っております。

引き続き、レベル3ですとか4なのですけれども、今まで御説明で申し上げたように、

これまでと割と大きく設計を変えていくというところもございますので、やはりレベル1や2の安定的な運用ということが基礎になりますので、こういったレベル2の運用状況ですとか、また、さらなる企業ニーズの把握等を総合的に勘案した上で、レベルの3、4については今後検討を継続していきたいと考えております。

続きまして、普及啓発のほうなのですが、12ページになります。

先ほど、申し上げました5月に普及啓発アドバイザリーボードを立ち上げて、各先生方から御意見をいただきました。

基本的な方向性としては、このアドバイザリーボードでいただいた御意見をできる限り実行に移していくということになるのですが、この5月末に開催した際にいただいた御意見を全て消化し切れているという現状にございませんで、まだちょっと具体的にこの実施に移していけるものが、少し中身的に寂しくなってしまうのですけれども〈WEBプロモーション〉ということで、もちろんウェブサイトのコンテンツの拡充はやっていかなければいけないという中で、例えば有識者ですとか、制度の運用管理者またはレベル段位認定者によるインタビューですとか、対談等の掲載ですとか、サンプル問題等の掲載も考えられるのではないかとということで、ウェブサイト訪問者数の増加に向けて、もちろんリンクの拡充もございますし、リターゲティング等の各種技術を用いたバナー・リンクの活用といったものもやっていかなければならないということです。

もちろん新聞・業界紙といったこれまでどおりの紙媒体での広報というものも、引き続きやっていかなければならないということで、そのアドバイザリーボードでいただいた御意見はほかにもございますが、そこは今後、産業環境管理協会さんのほうとも相談しながら、順次具体的なものにできるだけ移していきたいと思っております。

そして、この普及啓発のアドバイザリーボードの中でも、やはりそもそも名前がどうなのだろうかという話が出ておまして、そういったところが次のページでございます。

名称変更を検討する背景としては「中身と名称の齟齬」と言うことで、省エネですとか、そういった温室効果ガス削減だけでなく、環境エネルギーを広くカバーしている中で「カーボンマネジャー」という表現で本当に正しいのかということ、このカーボンマネジャーという言葉から、どのような長所を持った人材なのかということが、直感的に果たして知っていただけるのだろうかということ。

もちろん省エネですとか、CO2削減というのは現在も非常に重要なトピックではあるのですけれども、かつての10年前とかと比べると、やはり社会的なムーブメントとしては少し勢いが弱まってきているのかなという現状もあり、現在関心の高い「スマートコミュニティー」ですとか「再エネ」といったワードを取り込んでいく必要があるのではないかと、という問題意識の反面、現在のトレンドばかり追っただけでは、また改名ということになるのでございますので、そういったところは長期的な観点で注意していかなければならないということもございます。

そして、右上に掲げてございますのは、決してこの中から御選択くださいというもので

はございませんで、何もないとお話も弾まないのということで、事務局のほうで少しだけ考えて幾つか御提案をしたところがございます。こういった「エコ」という言葉を使ってみるのも一案かと思えますし、また、下から2番目でございますような、そもそもこの実践キャリア・アップというのは知識だけではなくて、実務能力を見ていこうというところからスタートしているものですので、きちんとこの「実務」という言葉を織り込んでいくことが大事ではないかという視点もあります。変更ありきではなくて、やはり何年かは続いてきたものでございますので、変えないということももちろん選択肢に入れながら、議論していく必要があるかと思えます。

この名称の議論につきましては、きょうの席で結論までいくというのは非常に困難かなと思えますので、よろしければこちらでの御議論を踏まえた上で、普及啓発アドバイザーボードという形で、普及啓発の専門家の方々にお集まりをいただいた組織もございまして、こちらの御議論を踏まえて、その普及啓発アドバイザーボードへ一任という形で、整理をできればと考えているところでございます。

中身としてはおおよそ以上でございまして、最後のページがスケジュールでございます。

ワーキンググループの実施、今後の見通しについては、実施のスケジュールが未定でございまして、年度末において今年度までの総括ということで開催があるかもしれませんということ、レベル1については先ほどのeco検定のスケジュールでございます。レベル2も先ほどのトライアル試験をやった上で考えていきたいということで、名称変更は普及啓発アドバイザーボードのほうで検討させていただいた上で決定をして、御報告を差し上げたいということ、普及啓発の面につきましては、こちらも適宜普及啓発アドバイザーボードで、もちろんいただいた御意見を消化しつつも状況を見ながら、また開催をして御意見をいただいてというサイクルを繰り返していきたいと考えております。

ちょっと長くなってしまっていて恐縮ですけれども、資料の説明は以上でございます。

○松橋座長 ありがとうございます。

それでは、これからこれについて質疑応答を始めたいと思えますが、その前にきょうは人事異動がございまして、その関係で事務局のほうから御挨拶をいただければと思います。

○須藤参事官 先週金曜日、7月4日付でございますけれども、私の前任である高橋の後任といたしまして、産業・雇用担当の参事官に着任をしております須藤治と申します。

着任早々の大事な会議で恐縮でございます。重なってしまいまして、遅れて出席になりました。申し訳ありませんでした。

これからでございますけれども、少しでもこの制度が使いやすく、そして実効性のあるものになっていくようにということで微力ではありますが、全力を尽くしてまいりたいと思えます。先生方の御指導のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

ありがとうございます。

○松橋座長 よろしく願いいたします。

それでは、早速でございますが、今の事務局からのこの資料の説明に対して、御質問・

御意見等で、意見交換の時間をとってまいりたいと思いますので、御意見のある方は私のほうを立てていただければと思います、いかがでしょうか。

では、こちらから、山岸委員、平林委員、谷口委員のお札が上がりましたので、その順番でお願いいたします。

○山岸委員 皆さん、おはようございます。

私は久々の前回は欠席してしまったので、初めての方が多いため、どうもWWFジャパンの山岸と申します、どうぞよろしくをお願いいたします。

私からは3点質問と、コメントをさせていただければと思います。

まず、第1点目はこのeco検定との相互連携という形ですけれども、ちょっと質問に近いのですが、これは一方通行の認定になるのでしょうか。というのはeco検定を取った人がカーボンマネジャーを同時に取得することは無料でできるけれども、カーボンマネジャーのレベル1をとった人が、eco検定をとれるわけではないという形なのかなと御説明では理解したのですが、そうなったときに値段等々と考えて、これは別に悪いとかそういうことではなくて、一受験者の立場でとって考えてみたときに、どういう選択をインセンティブにするかというところと当然安いほうを受けるだろうなど、受験料が安いほうをとって、もしeco検定をとれば、自動的にカーボンマネジャーのレベル1のほうもとれるのだとすれば、多分最初はそちら側から受ける人が多くなってくのではないかと感じられます。

それに加えて、カーボンマネジャーのほうを取ったとしても、eco検定がとれないのだとすれば、カーボンマネジャーを取るインセンティブというのは余りなくなる、少なくとも、レベル1に関して言うと余りないのかなという感じがしています。何かその辺は若干戦略的に考えてもいいかなと、それが現状の路線で、考えられている路線でまずいということではなくて、少し考慮しておくべきかなと思った程度です。

2つ目は、今後よりこれを活用していただくということを考えたときに、何があり得るかなと思ったのですが、やはりこれを従業員なり、何なりいろいろな方々が取っていることがアピールできるようにしていくのが必要かなと、その点で言うと、環境報告書とかCSR報告書といったところに、何か書けるようにするというのも一つあるのかなと思いました。

それ自体が、目的化してしまうと問題だと思うのですが、そういう人材を持っていることが企業さん自体のアピールにもつながると、ひょっとしたら企業さんの側にも何らかのインセンティブが湧くのかも思ったりしました。

3番目は、最後の名称の件についてのコメントです。

私自身としては、余り変えないでほしいというのが率直な意見です。というのは、これはそもそもCO2の削減、温室効果ガスの削減を今後とも長期にわたってやっていかなければいけないと、それに当たっては人材がやはり必要ですよということから発した制度だったのではないかと記憶しています。

そもそも制度の目的から考えますと、世間的にちょっとカーボンの話が盛り下がっているから名前を変えましょうというのでは、本末転倒なのではないかという気が若干します。

やはり本来はその現状こそが問題なのであって、そこを盛り上げるためにはやはりこの制度が地道に広がっていくということが必要なかと思ひまして、仮に変えるとしても、エコという名前を安易に使いますと、最初にWWFジャパンという組織は環境保全団体ですので、エコという名前が使われるのであれば、では生物多様性も語られるのですよねとか、先ほどのeco検定のほうがカバーしておられるように、生物多様性問題とか、そういった環境というのは単にその省エネと、CO2や温暖化の話だけではなくて、その他もろもろも含むというニュアンスが出てしまうので、そこはちょっと環境とかエコという言葉を使うときには気をつけたほうがいいかなと思います。

私個人としては、カーボンマネジャーという名前を余りこころろ変えると、やはり人材を育成するというのは長期でやるべきものなので、余り変えないほうがいいのかと個人的には思ひます。

済みません、長くなりました。

○松橋座長 ありがとうございます。

それでは、続きまして平林委員、お願いします。

○平林委員 意見ですけれども、1つはこの制度ができるということに着目してきたと思ひます。

したがって、国として何ができる、期待をするのかをもう一度ここで協議していただいたほうがいいのかと、私が考えるのは企業の中でできるということと、国が考える人材としてできるということとは、タイムギャップが多分あると思うのです。企業がどうしても2、3年の利益、売上、利潤、雇用ということから、どういう人材がほしいのかということを考えるわけで、そのときの「できる」ということと、国としてこういう制度で資格制度でないにしても、国費を使ってこれだけの委員会を起こして、戦略的に10年、20年、30年を見据えて成長分野の人材を考えたときに「できる」とは何かと、特に我々が議論してきたのはエネルギー分野であったかと思ひます。

カーボンマネジャーという名前の発祥も、できるだけCO2を排出しないという、それが環境、省エネにつながるという発想で、特にカーボンというところへ重きを置いたわけですが、これは多分これからも国の数十年のエネルギー戦略を考えたときに、やはりCO2を出さないということが一つの路線であるし、今は国際的にはいろいろ外から見ますと、日本もそれる路線に入ってしまったのかと、あれだけの大惨事が起きたから少し仕方がないかなということはあると思いますが、ということを見ると、やはりここでのカーボンマネジャー制度というのは、何ができるかきちんと再確認すべきです。名前で私は特に意見はございません。いろいろな名前があつていいと思うのですけれども、いずれにしても、何ができる人材をこの制度は狙っているのかを、もう一度原点に立ち戻って考えていくべきではないかというのが1つの意見です。

2つ目の意見としては、それは繰り返しになりますけれども、企業のリサーチをして、企業の事情を聞いても、それはある一部分でしかあり得ません。企業が「できる」と期待

するのはあくまでも自分たちの企業の発展、その領域、業界に限られますので、もっと大きく考えて国としてどういう成長分野で、エネルギーも扱っているようですから、これが「できる」人材とはどういうものか、これはぜひ議論していただきたい。

3つ目は、そういう観点で見たときにこのレベル1の内容をちらちらと見ましたときに、非常に私は偏っているのではないかなと思います。なぜかと言いますと、原子力関係は何も入っていないのです。私は原子力に対して賛成だというわけではございません。あれだけの事故を起こして、いろいろなことを日本は考えていかなければいけないし、絶対的な安全はないにしても、それにふさわしい安全ということを、技術的にとことんやる必要がございますので、頭から反対でもないですし、かといって推進しろというわけでもございません。

正しく、日本の今置かれているエネルギー事情を成長分野の人材にわかっていただいて、その中には原子力もあると思いますが、このレベル1を見ると、再生可能エネルギー、火力、水力、いろいろありますけれども、原子力は何で出てこないのかと、禁句にでもなってしまったかと思えます。

日本が、これから将来を考えたときウランだって100年たったらなくなるかもしれません。けれども、「もんじゅ」とかいろいろプルトニウムを使ったプルサーマルというすばらしい技術の芽はあるのでしょうか。非常に課題が難しいだけになかなかそこへはゆけないのですが。でも、この成長分野の人材の最初に入ってくる人たちに、そういうことがある程度インプットする必要があると、過大にインプットされてももちろんいけませんし、かといって全くないというのも随分これは偏っているなと思った次第でございます。

以上、意見を申し上げさせていただきました。

○松橋座長 ありがとうございます。

それでは、谷口委員、お願いします。

○谷口委員 谷口でございます。

既存資格を使うということで、eco検定を採用していくというのは、私は賛成します。

ただ、なぜeco検定かという部分をもう少し説明しないと、特定資格だけをなぜ取り上げるのかと国民から見たときに、一部の資格だけをどうして推すのかということで、この資料でいくと5ページまでは整理できているのですが、レベル1が「試験により認定」と、次にeco検定というところは物すごく飛躍があって、5ページでレベル1を、既存資格を見直した場合にどういう要件なのかとのページがあって、それに照らし合わせて日本の国内の資格を見たときにeco検定があるので、eco検定がありますというプロセスが抜けているのであって、結果、結論は、eco検定はいいと思うのですが、そこがないとなぜeco検定ですかと、何か変な関係があるのですか、しかも、レベル2までつくとすると、それなりの理屈が、もう少しいい整理、表現ができないといけないのではないかな。多分もう整理はされていると思います。

それから、逆に7ページのeco検定の概要というのはこういうものだ、というのを裏返し

てとって、レベル1というのは、こういうことがわかると、なのでeco検定だと言います。

これはやはり、ワン・オブ・ゼムだと國生さんがおっしゃったように、であれば、例えば大学の講義であったり、既存の合わせ技で大学の講義で、こういう講義ともう少し簡単な資格を合わせてレベル4にしてあげる。やはり間口を広げるということであれば、eco検定一本でなくても、ほかの体系でこれとこれを合わせてレベル1ですねといういろいろな組み合わせがあると思うのです。特に大学は非常にこういう意識が高まっていまして講義もあるので、やはり大学の講義などというのは認めてあげてもいいのではないかな。

とにかく、裾野を広げる。だから、eco検定を取る人も、結構大学生も多いので講義だっ
ていいのではないかと、国がやっている講義をどうしてこっちで認めないのかという違和感
もあるので、いろいろバリエーションがあってeco検定、あるいはこのスケジュールもいい
と思うのですけれども、そういう整理がまず必要だなというのが1つ目です。ここが一番
大きなところかなと思います。

それから、ニーズのところですが、やはりむちゃくちゃニーズがあるものという
のはもう必置資格としてもあるわけです。多分エネルギー管理士とか、エネルギー管理
員とか、国がきちんと全部それぞれの資格というのはあるので、ニーズを追求すると、も
うそれは既存でなっているので、やはりこのニーズは何かという必置の資格へのステップ
アップ、大久保さんがいつもおっしゃっているように、このステップアップのキャリア・
アップなので、そういうために順番にレベル1からいくと、最後は国の必置義務、必置資
格にきちんとステップができますよというのがニーズではないかなと思っていて、また別
段のニーズをつくるというのもいいのですが、そういうステップアップで最後はプロにな
れますよということでも十分なニーズではないかなと思いますので、その違うところでニ
ーズがあるよと言う必要も、余り違うロジックを立てる必要もないのではないかな。

きっちりレベル1をやって、eco検定をやって、次々やっていくと先ほどおっしゃったよ
うにCSRのレポートを書けるとか、エネルギー管理士をとれるとか、そういうステップア
ップの議論があってもいいのではないかな。これはやはりキャリア・アップの資格、個人
としての能力を評価するのであって、ダイレクトな資格に余りリンクする必要もないの
ではないかな。そういう人材として雇ってくださいとか、学生の就職であったり、中途採用
でもこういう能力があるのですよというカーボンマネジャーのレベル3なので、私はこう
いう能力がありますとのサーティフィケーションでいいのではないかな。

もとから、2年間くらいずっと私が議論してきて、皆さんの御意見だと思うのですけれ
ども、その辺を見失うと、ちょっと揺らいでくるのではないかなと思います。

以上、2点です。

○松橋座長 ありがとうございます。

では、まず今御指摘いただいたところについて、順番にお願いします。

○國生専門職 では、私のほうから幾つかお答えをいたしたいと思います。

まず、山岸委員からいただいたところで、そのeco検定との関係づけ、連携について一方

通行といった形なのかということについては、今考えているのはおっしゃるとおりで一方通行のところでございます。

これも当然、逆にそのカーボンマネジャーを取ると、eco検定の認定を受けられるという形にすると、当然その東京商工会議所さんから見ても、eco検定をとれる条件といったものがふえるということになりますので、当然ここはその相手というものとも調整が必要になるとのことは当然ございまして、正直まだ最終的な双方向といったものを考えていませんというわけではないのですが、まだそういった相手のあるお話の中で、まだそこまでは詰めきれていないというところでございます。

実は、同じ御意見をきょうは御欠席の末吉委員からもいただいておりますので、そこは御意見のあったところとして、今後検討していきたいと思っております。

それと御意見としていただいた、企業としてのこういう人材を持っていますよということが、アピールしていけるよということも大事ではないかとの御意見につきましては、私どももいろいろな企業さんに、いろいろなヒアリングをしている中で、例えば本当に名刺に刷るですとか、そういったことができないものでしょうかといったことはお願いをされていて、そこはとにかく企業の方も大変すばらしい制度とは思いますがおっしゃってくれるのですけれども、やはり今余り規模として広がっていないですよというところがどうしてもネックになってしまうのです。

なので、そういった知識ばかりではなく、実務経験も見ていくといった長所は十分認めていただいている、そういうところで特色があるのだらうと思っておりますので、そういった中である程度の規模が出ていけば、そういった面も出てくるかなと思っておりますので、そういったことを今回の御提案しているeco検定との関係づけといったところで、少し規模感を出していったら、とは言っても、余り知名度がないですよというお声を、できるだけ少なくなるようにしていきたいと思っております。

名称については、御意見をいただいたとおり、やはり変えないということも一つの大事な価値観だと思っておりますので、そこはしっかりと受けとめさせていただきたいと思っております。

平林委員からいただきました国として何ができる人材というものを期待しているのかのことも、改めて議論する必要があるということについては、もちろんこの制度の根本的なところでございますので、現状としてレベル認定者数が余り多くないということも踏まえて、やはりそういった原点に立ち返る必要があるのではないかといった御指摘は、受けとめさせていただきたいと思っております。

そういった中で、我々がこれまではどういう人材が求められているのかというところをどうしても企業へのヒアリングですとか、企業へのリサーチによってはかかっていくのだということも考えていたところはあるのですけれども、やはり先ほどおっしゃったように企業からの声と、国として考えるところというのはやはりタイムギャップもあり、それぞれ思うところも違うというのは確かにそのとおりで、確かに企業からの声といったものを、

何となく絶対視していたようなところもあるかなという気もいたしますので、国としてどういうものが求められているのかというところは、我々は事務局としてもう一度、このレベル1、2の再設計をしていくに当たって考えていきたいと思っております。

具体的に御意見をいただいた原子力のお話につきましては、確かにこういう現下のエネルギー情勢を踏まえて、やはり原子力というものが一つの成長分野であるという御指摘はそのとおりだと思います。そういった中で、もともとカーボンという中でスタートしたものであることの親和性や、一体的な施策として運用できるかということも含めて、その御意見については、まず検討課題とさせていただきたいと思っております。

谷口委員からいただいた御意見につきまして、eco検定との関係づけにつきまして、少しプロセスといいますか、いわゆる論理に飛躍があるというところについては、確かに私どものほうではもうここまでがターゲットですとか、対象分野ですとか、難易度といったところで、整理をさせていただいたところがございますけれども、やはり受験される方の一般国民といいますか、そういった外の方が見れば、何となくなぜ急にeco検定がと思われるところもやはり少しあるかなと思っておりますので、今後本当にこういった連携した形で運用をしていく、そして、さらにこのことを周知していくという際には、そういった点で飛躍があると受け取られないように、プロセスをちゃんときっちりと整理していきたいと思っております。

また、国の大学の講義等も、あわせてよく検討すべきではないかということについてはそのとおりでございます。先ほどもちょっと申し上げたように、この検定はあくまでワン・オブ・ゼムでございます。eco検定だけをもってレベル1の認定と決め打ちしているわけではございませんので、言ってみれば、このレベル1との関係づけが可能なのは、今のところはeco検定のみであるという状況でございますので、そういったそのほかの代替手段については引き続き検討して、またどんどん道がふえていくということも、今後あるかと思っております。

そのニーズというところで、やはりこのニーズのあるものは最終的には決まり、この必置のものになっていくということについて、こういった最終的に必置のものになるようにといった視点は失わないようにということはそのとおりでございます。具体的にはそういったカーボンマネジャーというものが、その方が持っている資格というものを客観的に示せる資格として、広く一般社会に活用されてきているということが最終目標ですので、そこは一つの目標としては引き続き堅持していきたいと考えております。

ちょっとまとめてしまいましたけれども、以上でございます。

○松橋座長 ありがとうございます。

それでは、引き続きまして、もう少し皆様方からの御意見・御質問をいただきたいと思いますが、いかがでございましょうか。

そのほかに、御意見等はございませんでしょうか。

それでは、漆原委員、伊藤委員の順番でお願いいたします。

○漆原委員 前回の議論の際に、自主的に運営していくことが前提である旨の話がありました。それを受けてエコ検定合格者の認証という「裾野を広げる」ことが重要なのはわかりますが、仮にこの認証の経費を徴収しなかった場合、自主運営のためにはレベル2にどれだけ受験者が来て下さるかが重要となると思います。その場合、レベル2のインセンティブというか、企業のニーズなどがポイントとなるのではないのでしょうか。

その設定がうまくいかなければ自主運営にはつながらないと思っています。今御説明のあったいろいろなこの制度に対する理念とか、もちろん中途半端なものになってしまっただけは、長続きはしませんが、その反面、自主運営によってこの資格制度が維持できて、結果として環境に関心のある人材がふえて、あるいはその専門的な人材が育っていくということ自体も、また重要だと思います。その意味ではこの試験制度、キャリア・アップの段位制度を残すという観点から、名称の変更も十分あり得るし、ほかの試験または資格の一部免除などの連携が進んでいけば、それなりに意義のあるものになってくると思います。

理念も重要であるのは確かですが、この制度が残ることによる効果も、国としてもある程度評価をして、そこに自主運営という観点も勘案しつつ全体がわかる資料を用意いただければ幸甚です。

以上です。

○松橋座長 ありがとうございます。

それでは、伊藤委員、お願いいたします。

○伊藤委員 今までの議論にありましたところで、国の認定すべき制度の項目の話と、民間の認定しているであろう項目の話というこの大きな2軸があると思います。

そのときに、レベル1、2、3という話の中で、レベル1のところにeco検定という対応をさせていきたいと思いますという話題だと思います。そう考えたときに、谷口委員から先ほど、ある意味ではエネルギー管理士のキャリアステップというのを、レベル1、2、3というので例えばつくっていった場合に、これはもともと国で認定すべきという範囲だったと思います。それがキャリア・アップというのをうまくつくれているかというのは、今回の制度設計上大事なことだと思います。

なので、今の漆原委員のレベル2のところで、インセンティブをちゃんと与えるというのは、もしかしたら、エネルギー管理士につながるというところが、インセンティブにつながるのかなと思います。

ただ、大きく国側が認定してきている制度の話と、民間のほうのすり合わせのところは、今のところうまくいっていないので、結局集客ができていないということからすると、eco検定等のつながりというのをつくらなければいけないのでしょうか。

ただし、ワーキンググループの当初から参加されていた方々は思い出していただければと思うのですが、eco検定の認定の話というのは初年度実証実験からずっと行われてきていて、そのときにいろいろな議論と、いろいろな結果があったのをちょっと棚卸ししていただいたほうがいいかな。

なので、谷口委員がおっしゃったこの論理の飛躍というのは、この資料上、物すごく私も気になっていて、ただ、あのときにeco検定の方々がいろいろ出してくれたものを踏まえ、こういうふうに認証をすればよかったのではないかというのは、今だからこそもう一回棚卸しをして、谷口委員の指摘もしくはワーキンググループの皆さんがやや気持ち悪いと思う点があるかと思うので、そこはすっきりしていただくといいかな。

ただ、民間の認定委員のするところに関しては、制度をeco検定という、検定制度を認定するという話と、教育プログラムを認定するという制度の話は分けて考えないといけないのではないのかなと、実際に大学の教授が教育プログラムを、私も大学でやっているわけですけれども、大学の認定がなかなか上がってきていない現状からすると、eco検定というのをどう特別にうまく扱って、外に見せていくのかというところが、すごく気になるところかな。

なので、しっかり棚卸しをしながら、民間とお国の認定すべきところのつながりを、しかるべき見せ方をして、リリースしていかないと持続発展の形に持っていけないようだなと、なので、漆原委員の言われる、まさにこの制度は3年、4年かけていろいろ議論をしてきている中で、どういう自走をさせるかということに向けて、今民間への情報の出し方を工夫してくるのが大事なかなと思います。

なので、まずカーボンマネジャーで今のところは、国の認定制度と民間の認定制度のすり合わせというところの話なのですけれども、そこをeco検定というのを例にしっかり棚卸しをして、その上でワーキンググループの皆さんとも、この場でもしっかり合意形成ができ、外部からの説明責任も背負える形になるのが第1ステップかな。

その上で、私も広報アドバイザーのメンバーをさせていただいておりますけれども、民間のいろいろな動きは中期的にというのをとるに当たっても、しっかりエビデンスデータを持たないとヒアリングしていますとかでは、全く建設的に積み上がっていかないので、そこをもっと工夫して進めていかないといけないかなと、要は半年前も、1年後もいろいろヒアリングしてきましたでは多分だめで、こういう合意形成が進んできましたというところは、しっかり企業のニーズをうまく踏まえていかないと、普及啓発も進まないかなということ勝手に意見ですけれども、今のようなすり合わせをしっかりとしていければ、持続可能性を高められるのではないかなと思いました。

以上です。

○松橋座長 ありがとうございます。

それでは、ほかの方はよろしいですかね。

特によろしければ、事務局のほうからちょっとお答えいただきます。

○國生専門職 ありがとうございます。

まず、漆原委員からいただきましたことについて、全くそのとおりでございます。

私が言うのも僭越ですけれども、確かに今後の自主的な自立運営というところに際して、そのレベル2が鍵になってくると、そこは本当におっしゃるとおりでございます。

その中で、レベル2を受験するインセンティブといったものの設計が大事になってくるだろうということも御指摘のとおりでして、現在のこの本当にフラットな、正直な状況で言えば、やはりそのeco検定を経由してレベル1になった方が、言ってみれば、もっとそういった自己啓発をしたいという意味でもって、レベル2を受けてくれるというところが主たるインセンティブになってしまっていますので、そこをもうちょっと何かレベル2をとらなければと、思っていたようなインセンティブ設計というのがずっと課題ではございますけれども、検討させていただきたいと思っております。

そして、伊藤委員からいただきました、こちらもやはりeco検定との関係づけというところの理屈づけと申しますか、理論づけというものに若干飛躍があるといえますか、一足飛びになっているというところについては、我々としても過去の理論が全く整理・消化し切れていない部分があるのは勉強不足で申しわけないのですが、せっかく今回、先ほど少し距離感を感じるというところについては、谷口委員からもいただいたところでございますので、実際にそのeco検定との連携を公表して、周知していくまでの間にちゃんとこれまでの議論といったものをもう一回総ざらいして、外の方から見て違和感がないような、なぜeco検定なのかということが説明できるように、理屈はつけていきたいと思っております。

その中で、そういった資格の認定と教育プログラムの認定というのは別に考えるべきといった御視点も、過去の理論の復習と申しますか、棚卸しの中でもう一度再整理させていただきます。

また、やはりヒアリングといった中で出てくるものというのは、どうしても定性的な御意見というか、言ってみれば感覚に近いところがございまして、そういったところばかりを絶対視するのではなくて、エビデンスデータを聞き取っていくと。つまりどういった指標を、数字が使えるのかというところは、いろいろと考えていかなければいけないと思っておりますけれども、そういった意見ばかりではなくて、客観的なデータもちゃんと使っていくといった御視点は、今後のニーズをどうやって、どこにニーズがあるということを考えていく中で、大事な視点として考えていきたいと思っております。

ありがとうございます。

○松橋座長 ありがとうございます。

それでは、ここでの御意見は大体よろしいですかね、ひととおりの御意見をいただきましたが、2点確認したい点があるのですが、1つはレベル1の認定について、eco検定と関連資格との連携を進めていくという点について、幾つか御質問・御指摘はありました。一方通行なのかとか、eco検定の利用そのものには賛成だけでも、もう少しきちんとした理由づけ、過去の議論の棚卸しというものを踏まえて、ちゃんと説明すべきであるという御意見をいただいたかと思っております。ただし、eco検定と関連資格との連携をやめるべきだという御意見はございませんでした。

そこで、今後もこういったeco検定等の関連資格との連携に向けた調整を進めるということについては、この方向でさせていただいてよろしいでしょうか。

(「異議なし」と声あり)

○松橋座長 ありがとうございます。

それでは、この点については、この方向で進めさせていただきます。

それから、もう一点ございまして、この点については余り直接の御意見をいただかなかったのですが、レベル2についてでございまして、パワーポイントの資料で言うと11ページのところなのですが、いわゆる「わかる」と「できる」というこの資格の特徴の一つなのですが「できる」のところをこれまでは、実地の義務を課しておったのですが、11ページのレベル2の枠内にございまして、レベル2で想定する「できる」の力、例えば「(一定の指示の下に省エネ法の定期報告書を作成する等)」を確認するため、試験には、基礎的な実務能力を確認できる演習課題を盛り込むということで、すなわち研修義務を外すということがあるのです。

研修義務については、レベル3とか4とか、より上位のレベルにおいてこれを課していくということを事務局案として考えておるわけですが、この点についてはいかがでしょうか、よろしいでしょうか。

ちょっと御意見ありますか、どうぞ。

○平林委員 それを否定するものではないのですけれども、その試験の範囲の受験者への提示は、今まで研修が前提だったので、研修の時間と研修カリキュラムが実質的な試験範囲ということになっておったのですが、研修義務を外したときにレベル1もレベル2も試験の範囲の受験者への公知をどういう形でされるのか。毎回変えるのかあるいはこの試験の「できる」ということの目的からして、いつも同じ試験の範囲なのということにするのか、できることも今例として定期報告書が挙がっていますけれども、ほかにもできることの例が幾つかあったので、その告知をどうされるかを何か考えておられるかどうか、ちょっと御質問をさせていただきます。

○松橋座長 お願いします。

○國生専門職 まず、研修義務を外したことの告知ということは。

○平林委員 そうではなくて、試験範囲は外したことを前提にして、今度は受ける方がレベル1に対して、自分はどこを勉強してあげればいいのかと。

○國生専門職 なるほど、基本的には実際のこの制度の試験ですとか、運用のほうも、産業環境管理協会のほうでやってございまして、具体的にこういった形でというのは、もちろんホームページ等を使ってということになるのですけれども、そういった周知の方向ということでよろしいですか。

○平林委員 いえ、端的に言うと今回の試験の範囲は、この範囲から出します。次回はまたこの範囲から出しますと、その都度、受験者が困らないようにできるというのは、何ができるかという話になっていってしまうのですけれども、この制度のそもそも評価する対象範囲、エリアを明確にしておかないと、試験をつくるほうもつくれなくなりますし、受けるほうはもっと受けようとしたときに、どの範囲を準備してあげればいいのか、今までの

制度では研修カリキュラムが試験範囲をカバーしていたのですが、それを今度外すということでそれはそれで結構だと思うのですが、そうなったときに試験範囲を委員会、又は試験委員会が決めるということになるのかが質問です。

○國生専門職 済みません、ちゃんと御趣旨を理解できず、本当に申しわけございませんでした。

そこについては、試験ごとに今回の範囲はという形の、そういう風にはならないかと思うのですが、やはりそのカーボンマネジャーの中で、そういった図のこれまでのCO2、省エネだけではなくて、その環境エネルギーを広く見ていくという中で、具体的にどこが範囲ですよ、ということはもちろん明示していく必要があると思っておりますので、そちらは産業環境管理協会さんのほうを通じて、明確にわかるようにその周知はしっかりさせていただきます。

あと、研修義務については、レベル3、4も同じように外す形を考えています。

○松橋座長 レベル3、4もですか。

○國生専門職 レベル2のほうについては、今後追加的に試験をつくっていきますよということについてです。

○松橋座長 研修義務は外すのですよね。

ただし、レベル3とレベル4については実務経験がありますよね。だから、それを私は研修と言ってしまったのがいけなかったのかもしれませんが、実務はやらないといけなのですね。

○國生専門職 なので、レベル2においては、現在その運用を若干拡大したところの問題がまだございませんので、そこを追加的につくっていくと、その中で実務を確認できる問題を盛り込んでいくといった話の、レベルの改修といったものを進めさせていただきたいという御提案でございます。

○松橋座長 そんなことで、今、平林委員から御指摘のあった、その範囲を示すということについては、きちんとやるということでございますね。

ということで、よろしいでしょうか。

そうしましたら、レベル2については。

○谷口委員 済みません、もう一ついいですか、御意見等よろしいですか。

○松橋座長 はい、どうぞ。

○谷口委員 きょうの議論で、ちょうど何かレベルの引き方が変わってきているなど思っています、レベル2というのは先ほどeco検定の上位版というのも、視野に入れるという御提案があったのですけれども、そうしますと、レベル2を含めてレベル1と同じくもう認めてしまって、試験そのものも必要なのかという議論がもうワンステップ要るのかなと思うのです。

○松橋座長 いや、レベル2についてはあくまで、今のところ、あれですよ。

○國生専門職 レベルの位置づけを変えるものではないです。

ちょっと済みません、よろしいでしょうか。

○松橋座長 どうぞ。

○國生専門職 ごめんなさい、ちょっとレベル1に引き続いてレベル2を御説明したのが、どうしてもeco検定の上という形でちょっと見えてしまうのですけれども、御懸念されていたようなレベルの引き方といいますか、各レベルで求める能力といったものを変えることは考えてございませんで、やはりもともとレベル2の中では、その研修の中で実務能力といったものを見ておりましたが、そこを試験の中で見られるように、そういった技術的なところを変えていこうというところございまして、レベル1のほうでは特にその知識面だけで、実務の力といったものは求めませんけれども、ちゃんとレベル2において、そういった基礎的な実務の能力を確認していくという位置づけについては、きちんと堅持していきたいと思っております。

○谷口委員 ちょっと言葉のそこは大事なので、ではレベル2の上級版というのはいないという理解でいいですか。

ここを、もうすぐで2年半議論していて、どこにスレッショルド・レベルを置くかというところで、1と2の間に1まではとにかく43時間の講習を受けてまず知識だと、2からは「できる」ということは必須だということ、eco検定の上級版というのは、どういう位置づけになるのですか。

○國生専門職 なので、そのeco検定の上級版ではないということです。

○谷口委員 では、これはもうなしということですね

意見ということで、ニーズがあるけれどもやらないという理解でいいですか、5ページの制度は変えないということよろしいですか。

○國生専門職 もちろん、5ページの各レベルで求められる能力といったものは変えません。

その中で、試験だけではなくて、その既存の資格を使いながら認定していくといったような弾力化を図っていくということございまして。

○松橋座長 だから、谷口委員が心配されているのは、eco検定の上級版でレベル2の試験を代用するということは、今のところないと考えていいのですか。

○谷口委員 そうというのがまずないと、eco検定の中身とレベル2の中身とは、私は全く違うと思っていて、全然カテゴリー、問題の質が違うと思うのですよ。

そういう発想は全くないという理解で、このワーキンググループで2年半ずっとやってきたので、そこまでスレッショルド・レベルの2を変えるのであれば、同じように試験等をレベル2のeco検定のものを逆に認めてしまったほうがいいのではないかと。

いじらないのであれば、当然現状と同じようなやり方でやるのですよねという確認を踏まえて。

○國生専門職 済みません、レベル2については基本的に現状と同じままでやります。

eco検定とつなげていくのはレベル1のほうでございまして、レベル2についてはそうい

った研修義務を外して、試験の中でできるもので見ていけるようにするといった微修正を行いますけれども、ほぼこれまでと同じような運用ということでございます。

○松橋座長 ということでございますので、そういう前提でレベル2については、まずレベルの内容については、実質的な内容は余り変わらないのだけれども、研修義務というものは外して、その「できる」というレベルがわかるような、認定できるような問題を入れていくという修正をさせていただくということなのですが、それでよろしいでしょうか。

(「異議なし」と声あり)

○松橋座長 ありがとうございます。

それでは、これを認めさせていただきます。

もう一点、実はございまして、これはレベル2というか、このカーボンマネジャーの網羅する範囲全体なのですけれども、パワーポイントで言うと3ページで「省エネ」「温室効果ガス削減」以外に、昨今特にその重要性が高まっております「その他環境エネルギー分野」として「再生可能エネルギー」であるとか「スマートコミュニティー」「HEMS, BEMS」といったものが非常に重要性が増しておるということで、こういったものも広く網羅していくと、環境エネルギー分野というものを、広く網羅していくということについては、よろしいでしょうか。

これも御意見ございますか、どうぞ、平林委員。

○平林委員 現状においては、私もいいと思いますが、この制度の目指すところを先ほど申し上げましたように、国としてどういう人材を育成したいのかと、これは全く私の私案でしかないのですが、意見として聞いていただければいいのですけれども、例えば、日本のエネルギー自給を上げることのできる人材、今の日本はエネルギー自給率が4、5%なのですよね。韓国と並んで世界で最下位です。

これがもし、できる人材ということになると、ここにあることを全部わかっていて、かつ日本の将来を考えながらどういうことを企業の中でやらなくてはいけないのか、日本として、これから赤字国家になっていくかもしれない中で、どうやってエネルギーというものを日本に安定的、戦略的に供給していくかという、非常に上位の戦略的な国の方針の一番底辺を支えるいろいろな層の企業の中における、いろいろな人々をそういうところに、やはりそういう一部が、そういうことに関してできると、再生可能エネルギーもそうでしょうし、原子力もそうでしょうし、いろいろな省エネもそうだと思います。

要するに、日本のエネルギー自給率を上げることができる人材と、私は個人的に意見を申し上げさせて、提案か検証をしていただけると、そんな人材育成ができるかどうかですけれども、ぜひ実施事業の中でそういった人材育成というところを銘打っていただくと、国民こぞって日本全体のエネルギー自給率を上げるなら、そこに貢献できるのならば、そういうところに自分の今の仕事はどうつながるのかということを考えながら、働いていただけると人材という提案を、個人的にちょっとさせていただきたいと思います。

○松橋座長 ありがとうございます。

まさに、私自身は御指摘のとおりだと思っております、当初「カーボンマネジャー」「省エネ」「温室効果ガス削減」と書いておりますが、これも非常に狭くそれだけをとるというわけではなくて、伊藤委員、ちょっと御意見ありますか。

ちょっとだけ補足させていただきますと、当然のことながら、これはエネルギー、CO2を取り巻く状況をきちんと幅広く基礎から理解するということであって、当然それをきちんと広く考えればわざわざ断らなくても、そこに再生可能エネルギーが入っていることも当たり前のことですし、エネルギーを管理する、省エネを進めるという中でスマートコミュニティやHEMS、BEMSが入ってくるというのも当たり前のことで、ある意味ではわざわざ断るまでもない話でありますし、その中には広く言うと、今、平林委員から御指摘いただいたエネルギー自給率を上げるということも入っておるわけですから、あえて、ちょっとここに御確認というくらいの意味かなと私は考えております。

伊藤委員、いかがでしょうか。

○伊藤委員 今の大きな方向に向かって、ただ、着実に国の制度の話と民間の制度の話考えたときに、国の制度において、国の各種政策で再生可能エネルギーの話があったり、スマートコミュニティの話があったりするかと思います。

なので、ここの部分に関しては、国の制度として認定すべき項目というのはありますよねと、特に例えば、スマートコミュニティに関しては一定のサイクルを経た政策かと思えますけれども、その政策を形にちゃんとヒアリングをした上で、建設的なスマートコミュニティにはこういう能力が必要だったということ、エビデンスとして持ってプログラムの項目にしていただきたいと思います。

なので、志に向かって今の現実で、どういうことを国としてやってきたのかを整理した上で、そういう設問をつくっていかないと、民間としては、スマートコミュニティは全然別の話がいっぱい走っていると、なので、その話の前にひとまず、国の政策として整理をいただけるといいかなと思います。

○松橋座長 御指摘、ありがとうございます。

○平林委員 済みません、先生のおっしゃるとおりだと思うのですが、もう一言ちょっとお話をいただければ、こういったスマートコミュニティ、再生可能エネルギーということが、このレベル1にチャレンジしてくる人たちには、やはり何のためにかやるのか、そういう次の目的を明確に提示してあげないと、これは何ができる資格なのが、薄れてしまうのではないかと思います。スマートコミュニティだとか、再生可能エネルギーだとかは、目の前にある仕事なのですけれども、その先に何があるのか、目的を明確にする7段階のイギリスの制度を成長分野でやろうというのがプロジェクトのスタート点だったと思います。先生がおっしゃるようにそれも含まれているということで、埋没させるのではなくて、むしろそれをばんと出して、そういうことのできる人材育成と言ったほうが、第一線の人たちには非常にわかりやすいと思います。この制度は、自給率を上げることなのだということで、非常に単純に訴えれば、それに向かってチャレンジしようという気持ち

が出てくるわけで、再生可能エネルギーだとか、スマートコミュニティーだけであると、やっている企業の皆さんにはいいなということになるのだけれども、多くの国民の、特にこれから成長していこうとする若い人たちに向かって、この題目がやはりほしいなというのは先ほど申し上げた、ことです。

そういう気持ちだということだけを言わせてください、以上でございます。

○松橋座長 平林委員の気持ちはよくわかりました。

もちろん、いろいろな人が受けるわけで企業もあれば、また、一般のNPOの方とか、一般市民の方もありますので、もちろん大きな目的を見失わない中で、例えば今後のビジネスですとか、そういうことも考えていかなければいけない。

国と民間の関係もまたしかりで、そこも踏まえてやっていくということで、それは重々承知しておりますので、その上で今言ったような意味で、環境エネルギー分野というものを、広く網羅しているということについてはよろしいでしょうか。

(「異議なし」と声あり)

○松橋座長 ありがとうございます。

それでは、きょう御議論させていただいた中に、もう一点実は確認したい点がございません。

今の平林委員からの御指摘とか、以前にいただいた何名かの委員からの御指摘の中にもあったことなのですが「名称について」ということでございます。

現状、我々が今何で苦しんでいるかということ、委員の皆様方には大体御理解いただけるころかと思いますが、先ほど漆原委員からも御指摘のあった自主運営に向かっていく中で、受講者が非常に伸びないというところに大変苦戦しているわけでございます。

もちろん大局的な我々の目的ということを見失わないことと、その一方でサステナブルな運営に向かっていかなければいけないというところを踏まえて、普及啓発面の課題として名称について、今若干考えているところがあると、普及啓発のアドバイザーボードというものをつくって、広報・マーケティングに高い知見を持つ方々にお集まりをいただいているということでございます。

ここで、皆様への御相談はこの普及啓発アドバイザーボードに、名称についてちょっと考えていただきたいと思っておるのですが、一方でこの名称については大局的な観点から、軽々に変えるべきではないという御意見と、自主運営という点から名称変更ということもあり得るのだという御意見と両方をいただいたわけです。

ということですから、このアドバイザーボードに考えていただくのですが、座長としての、御提案としては一応考えていただいた案を一度このワーキンググループに持ってきて、そこで審議ないし承認という形をとらせていただければと思うのです。やはりいろいろ賛否両論といいますか、いろいろな御意見がおありでしょうから、ここに御一任という考え方もあるのですが、やはり一度アドバイザーボードでいろいろもんでいただいたものをこちらに上げていただいて、そちらで審議するという形をとらせていただいてもよろ

しいでしょうかというのは、委員の皆様と事務局のほうにも、両方にお尋ねしなければいけないのですが、事務局のほうはよろしいですか。

委員の皆様、それでよろしいでしょうか。

(「異議なし」と声あり)

○松橋座長 ありがとうございます。

それでは、アドバイザーボードにいろいろ知恵を絞っていただき、それをこちらのワーキンググループのほうで、最終的に審議させていただくという形をとらせていただきたいと思います。

実は、これにて本日の議事につきましては、終了ということになります。

次回、ワーキンググループの開催については今のところ未定でございますが、必要に応じて事務局から御案内があるかと思えます。皆様には引き続きの御協力をどうぞよろしくお願いいたします。

苦しいところではございますが、何とぞ皆様のお力添えをお願いしたいと思えます、よろしくお願いいたします。

それから、大久保主査からコメント等がございましたら、お願いいたします。

○大久保主査 きょうは、御議論いただきましてありがとうございます。

皆さんから御指摘があったとおり、この制度そのものは国家戦略プロフェSSIONAL検定という性格づけをもととしていまして、いわば国として重要な戦略テーマを推進する上で、必要な専門人材を育成するというのがこの範疇の定義でありますので、介護が高齢社会の対応に、非常に密接に関連をしているように、あるいは6次産業化のほうは農業・漁業の再生とか、競争力強化ということと密接に関連しているように、このカーボンマネジャーも国としてこれから推進していく重要なテーマを担える人材をつくらうということが一義的な目的なのだろうと思えます。

ただ、ほかの2つと違って、議論を始めてからの4、5年の間に随分いろいろ戦略の試行錯誤、揺らぎがあるところなので、それに沿うような形で、内容とか名称についても考えていく必要があるのだと思うのですが、そうは言っても市場に普及させなければいけませんので、市場のニーズも十分に把握しながら、それと折り合いをつけていくというテーマなのだろうと思えます。

この手のものは、普及するまでに時間がかかるわけで、一般的には新しい資格検定を導入してから一般化して浸透して、自走できるまでに20年というのが一般相場だと言われているらしいのですが、中には早く普及したものもありまして、10数年前にキャリア・コンサルタントという資格が生まれましたが、国のキャリア支援という事業に合わせてつくった専門職で、技能検定もつくりまして、10年間で8万人という数字になっています。この10年間で厚労省が出した資料の中で、この言葉が書き込まれたことは数えられないくらい、いろいろな部分で使われています。

そういう形に事業との連動を図っていくことができれば、普及するのではないかなと思

っております。

最後の座長からの説明で、それを具体的な形にするのがある意味ネーミングであって、ネーミングは普及委員会のほうで考えて、難しい仕事を普及委員会にお願いしているのだと思いますけれども、ネーミングはより求めているものを正確な言葉で伝えて、略称をつくるほうがいいのか、マーケティングの観点からなるべく短くて、インパクトのあるものをつくるのか、もうその入り口だけでも相当難しいのではないかと思います。ぜひ御意見があればまた頂戴をしたいと思っております。また引き続きの御協力をお願いしたいと思っております。

今日はありがとうございました。

○谷口委員 先生、一つだけ中身の確認をよろしいですか。

レベル1はもうスタートということなのですね。要は、レベル1の開始時期はもうきょうのワーキンググループでゴーが出れば、もう始まるのですか。

○國生専門職 その上で、東商さんとの調整も経た上で。

○谷口委員 3、4はどうなのですか、3、4は中止するのか、今までどおりずっとやっていくのかというのは。

○國生専門職 3、4については、基本的にまだ、今のところは1、2の運用のめどが立ってから検討いたしますとしか、まだ申し上げられない状況ではございます。

○谷口委員 私は、こちらの委員会もやっているのですけれども、3、4はかなりきついで、ワーキンググループで早く意思決定をしてほしいなとは思っているのですが、ちょっと中止して今後のことを、実際あってもなかなか集まらないのだけれども、3、4は見直したので中断というのか、開店休業というのですかね。

○須藤参事官 一言で言えば、1、2でやった状況を見てから、また再度考えましょうということです。

○谷口委員 ということですね。

だから、3、4は実質できないというこの文言どおりで、1、2をまずやってみますと。実務方としては、そういう。

○松橋座長 やること自体が非常に厳しいから、中断なら早く中断ということを書いてほしいという意味ですか。

○谷口委員 もしくは、参事官がおっしゃったように状況を見てからというもやっとした表現で、実質はやらない、できませんよねということでもいいのかなと、中断というちょっと言葉が重いので、今おっしゃったように1、2を見てからだと思うのです。

○松橋座長 ということであれば、恐らく心としては通じておるという感じかと思っておりますが、よろしいでしょうか。

今、言ったようなことで大変苦戦はしておりますが、エネルギーを取り巻く状況を考えてみますと、大変重大な動きがあります。電力システム改革、ガスシステム改革、エネルギーのシステムは大きな変革を迎えておりまして、新しい変化が起こってくる中で、それ

と表裏一体になってCO2の問題が、大変密接に結びついておりますから、実際には重要性は非常にあると思うのです。

決して東日本大震災でCO2は下火だからということは、表面的にはそうだけれども、よくよく考えてみると大変重大ですし、アメリカ等の動きを見ても、やはりそう猶予ができる状況ではないということですから、何とかこの制度をもう一回持ち上げて、世の中のお役に立てるような形にしていかなければいけないのだろうと、事務局も含めて大変苦勞しているところだと思っておりますので、ぜひ皆様方にもいろいろな御意見、アイデアをいただいて、何とかもう一度持ち上げてまいりたいと思っておりますので、何とぞ、よろしく願いをいたします。

そうしましたら、きょうはこれで終わりということで、以上をもちまして「カーボンマネジャーWG」の第14回会合を終了いたします。

本日は、誠にありがとうございました。